

---

# けいおん！ ～マネージャー物語～

睡魔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！ ～マネージャー物語～

### 【Nコード】

N8375S

### 【作者名】

睡魔

### 【あらすじ】

唯璃「このお話は、必要性を疑われる軽音部のマネージャーと、その婚約者を中心にしたハートフルラブコメディです！」僕「あれ？ そうだっけ？ 何か違う気が……」唯璃「？ どこが違うの？」僕「これは僕を主役にしたホラーだった気が……」唯璃「あ、そうだったね。勘違いしてたよっ」澪「違うだろ！ 軽音だろ！」僕「な、なんだってー！」 現時点でヒロインは出てきていません。

## 第0曲目　ちよつと哲学ばいじつと言って頭がいいよじつを見せてみる（前書き）

連載をもう一つ増やしてみたなう。

## 第0曲目　ちょっと哲学ばいこと言って頭がいいように見せてみる

僕はまず、断言しておこうと思う。

並行世界は存在しない、と

なぜ、僕がこういうことを宣言しようかと考えた経緯を説明しようと思う。

この物語は、というより最早物語とも言えないほどの平和すぎる日常を語っていく上で、僕は焦点を当てられるべきではなかったんだ。もっと、別の人がやるべきだったんだ。

そう言っても僕が語っていくことは既に決定していることだからもう曲がらない。

『決められて、定められた』のだから、もう曲げられない。

僕なんかじゃ、曲げられない。

もし、世界を一つの大きな意思と考えるのなら、その大きな意思が『決めて、定めた』のだから、もう曲げようとも思わない。でも。

そんな一つの大きな意思がこの世界について語ったのなら、どんなスケールになるのかは分からない。

だから意思は考えた。

その結果、意思以外のさまざまな物に語らせた。

この場合は、僕。

言えるのなら文句の一つも言ってやりたいが、もう決まったらしいので、意思が考えた物語の登場人物にすぎない僕にはもうどうすることもできない。諦めるしかない。

さて。

そんな過去のことは置いといて。

僕の最初の宣言について話そう。

なんのことは無い、そのままの意味だ。

確かに、いろいろな世界はあるのかもしれない。

だけどそれらは一つとして並行してはいない。  
だけど、交わりもしない。

言うのなら、ねじれ。

って、こんなことを考えるのは野暮ってもんか。  
まあ、あらかじめ言っておくと、

僕は僕であり、ぼくでは無い。

意味は理解しなくてもいい。

でも、もし僕をぼくだと思っているのなら。

そんな考え即座に捨てることを推奨する。

僕はあんなに立派ではないし、あんなに堕ちて無い。

何より、僕に代用品は要らない。

さて、言いたいことも言ったし、この辺でおさらばしようかな。  
じゃあね、僕。いや、ぼく。

**第1曲目 なぜフヲコンにならなかったのかと思うと残念で仕方がない。本当に**

連続投稿なう

## 第1曲目 なぜブランクにならなかったのかと思うと残念で仕方がない。本当に

この僕が桜ヶ丘高校に入学して2日目になった。

今年から共学化したこの高校は、僕の家近くにあり、通いやすいという点に特化している。この点で得をするのは僕の家族だけだろうけど、他にも家が近い者はいるのかもしれない。しかし、そんなことは僕との関係性は絶無といっても過言ではないので、端にでも置いておくことにする。

さて。今、僕の家族と言う言葉が出できたので、いい機会だからここで語っておこうと思う。

僕は五人家族で、父、母、姉、僕、妹、という構成だ。

まず、僕の両親についてだが、一言でいえば、ただの旅行好きだ。今も家にいない。はつきり言つて、今どこにいるのかも分からない。いつからいないのかも分からない。いついなくなるのかも分からない。これだけ聞くと、記憶に障害があるのかと思われるが、決してそうでもない。この僕でも、いくら中学生の頃のテストで全教科0点というふざけているとしか思えない結果をとった（ふざけていたのならまだいいが、自分なりに真面目に書いて、解答欄も全部埋めて、よしこれなら行ける！ と思つて出した結果がこれなのだから、救われない）この僕でも、自分の興味ある事くらいは覚える事が出来るし、人の名前は忘れない。と思う。しかし、両親がいつ出で行ったのか、という事象に関しては何も覚えていないのだから不思議だ。これは僕以外の家族、つまり姉と妹にも共通する。実は両親は超能力者で、出て行く時の記憶を消したんじゃないのかという結論で自分を納得させている。無理矢理すぎるけど。

次に妹は、これはまたできた奴で、気配りは出来るわ、面倒見はいいわで、両親が欠けている我が家の家事を一手に引き受けている。手先が器用なので、なんでもそつ無くこなし、勉強面に置いても特に問題はなく、さらに美少女、という完璧超人よろしくな人

間としてのスペックの高さを誇っている。僕とは対極に位置する人間だ。たまに傷なのは、周囲からの評価がシスコン気味であるという事。僕的にはシスコン気味、ではなくて完全にシスコンだと思っている。なぜブラコンにならなかったのかと思うと残念で仕方がない。本当に。

次は、というか最後はそのシスコンの対象である僕の姉について。僕と姉は同じ年である。両親が一年のうちにがんばっちゃったのかと言われれば、そうではない。僕と僕の姉は俗に言う双生児というやつあたる。簡単に言えば双子だ。しかし、姉の方が少しばかり早く産まれたがために、今僕はここで弟をやっているという訳だ。通常、男女の双子というのは、普段双子の例として用いられるそっくりさんのないいわゆる一卵性双生児ではなく、それとはまた違う種類の二卵性双生児というものである。僕たち姉弟も例によってそうだ。故に僕と僕の姉はそれ程似ていない。姉は、世間一般的に可愛い部類にはいると思う。僕がシスコンだとか、身内のエゴを差し引いてもだ。だが、それとは反対に、僕はそんなにパツとしないときどき、神様の理不尽さを感じる事がある。姉妹共に美少女であれば、とうぜん血の繋がっている僕も注目されるに決まってる。そして実物をみて、ああ……となった事が何度あっただろうか。今はもう慣れてしまったが、出来れば一生慣れたくなかったものである。今となっては手遅れだが。そんな僕の姉がこの家のヒエラルキーの頂点に君臨している。別に威張っている訳ではなく、結果的にそうなってしまうのだ。あの良く言えば穏和、悪く言えばマヌケ、擬音で表すとばわばわな性格が起因しているのではないかと、僕は考える。確かにあの性格には癒される事も多い。妹がシスコンになるのも分かる。実際僕も中学生時代（と言っても高校に入学してまだ二日だが）には級友からシスコンと呼ばれていたこともあった。僕と姉は双子なので、もちろん同じ学年に所属している。となると家でも学校でも顔を合わせる機会がある、ということだ。そんな人が目の前で、あの良く言えば穏和、悪く言えばマヌケ、擬音で表す



とぼわぼわな性格でおろおろしているのを見かけたら家族であろうとなかろうと助けようと思ってしまうに違いない。血のつながりからか姉が良く僕に助けを求めることがあった。それで弟である僕が助けたので、周囲からはシスコンという認識を受けていた。周囲が実際にはどう思っていたのかは知らないが、僕はそういう風に理解していた。しかし、学年全体がそういうのを気にしなかったし、それをネタに虐められるというのも無かったので、このことに関しては特に気にしていない。しかし、僕にはシスコンという噂が立ち、姉にはブラコンという噂が立たなかったのはなんなのだろうか。顔か。

とまあ、長々とだらだらと家族のことについて語ったところで、話題を学校に戻そうと思う。この高校は、去年まで女子校であったという事もあり、圧倒的なまでに男子の数が少ない。《見晴らしの良い草原、ただし四面楚歌》みたいなの！　とでも叫びたくなるほど男子が少ない。この高校に入学する男子といえば、今年から共学化という事実に興味があるやつか、この僕や姉みたいに家から近いやつか、はたまた男子が少ないからハーレム作れるぜやつぽー！　という浅はかなアホくらいなものだろう。その浅はかなアホが僕の友人のうちの一人なのだが、嘆かわしくて仕方ない。ちなみに、その友人は今日は休んでいる。二日目から休むとかどんなだよとか思ったりするが、そう思ったところで彼が休んだという事実には変わりないし、ならば脳の容量の一部をあの浅はかでアホで嘆かわしいやつに使うよりは、もっと別のぼくにとって有意義な事に使おうと思う。

ここで高校、いや、学校という教育機関全体についての話をしようと思う。普通、学校というものには学年という年齢によって区切られた区別の方法がある。幼稚園なら年少、年中、年長。小学校なら一年生から六年生。中学校、高校なら一年生から三年生。大学なら一年生から二年生、四年生または六年生、というように。まあ、義務教育が終わると留年というものがあるので、年齢によって

分けられているとは一概には言えないが。

話を戻そう。これまた普通の事なんだが、同じ学年に血縁者がいる場合には同じクラスにならない、というのが基本である。僕はまだ高校生のそれも二日目なので、先生達の詳しい事情は分からないけど、何かあるんだろう、きっと。

「うーん、部活かぁ。どうしようかなあ……」

ここまで普通の学校について僕が心の中で一人で議論してきた訳だが、その議論は今の僕の着いている席と、いま僕の目の前の人を着いている席、この二つによって無意味となってしまう。

「ねえねえ、ゆうたん。部活、何がいいと思う？」

知らんがな。

この人は唯さん。正真正銘、僕の双子の姉だ。世の中に絶対は無いと言う人がいるが、僕と姉さんの血縁だけは絶対だと言いつける。

小学校低学年の頃だったと思う。僕が母さんに「僕とお姉ちゃんはきょーだいなの？」と聞いた事がある。特に理由もなく、自分の語彙が増えてきたので、それを使ってみたただけだと思うのだが、それを聞いた母さんは「そうよ」と優しく微笑んで何処からビデオを持ってきた僕に見せた。そこに録画されていたのは、父さんが撮ったらしい僕と姉さんの産まれる時の映像だった。それが予想外にグロテスクで、子供心に恐怖したのを今でも覚えていると、そんなどうでもいい話は置いといて。

そんな僕の記憶にも戸籍上でも完璧な双子の姉弟である僕たちを同じクラスに放り込んだ時点で、この高校は『普通では無い高校』に僕の中で認定されてしまった。はい、拍手。パチパチ。

この高校のどこが普通じゃ無いのかは僕のこの三年間の中で理解していくとして、姉さんと同じクラスっていうのはなあ。嫌じや無い、それどころか嬉しいんだけどなあ。僕が姉さんを介護、もとい補助していかなきゃならないのか。それはメリットもあるし、デメリットもある。

姉さんを助けっていると、あのほわわんとした笑顔を近くで常に眺める事ができる。それだけで、その日の疲れが吹っ飛んでしまふ。

なに？ シスコン？ なんとでも言ってくれ。

しかし、常に姉さんが僕の近くにいる事で、周囲からシスコンのという認識を受けてしまう恐れがある。僕としてはなんら困る事は無いのだが、例えばもし、僕のことを好きな女の子がいて、勇気を出して告白しようとしても、常に姉さんが僕の側にいる事によって「私が入る隙間は無いかな」と言っただけで諦めてしまう事があるかもしれない。僕を好きな女の子がいれば、だけど。ここには僕の希望も入っている。そうすると、僕の輝かしいこれからの高校生活において女の子成分がごっそり抜け落ちてしまふかもしれない。それは、ちょっと、というか、かなり、嫌だ。

……まあ、どうにかなるか。プラス思考、プラス思考。

「ねえ、ゆうたん。聞いてる？」

僕の顔を覗きこむようにして聞いてくる姉さん。

「部活、なにがいいと思う？」

高校での自分の恋愛について考えていた脳を、姉さんの話に切り換える。

部活、部活ねえ。正直言っただけ迷ってる。部活選びは高校三年間を決めると言っても過言では無いから、慎重に選ばないと駄目だ。とは言ってもやりたい事が無い。でも時間はあるし、じっくり考える事にしよう。

「まだ時間もあるし、ゆっくり考えれば？」

僕はそう、無難に返しておいた。

放課後。

僕はまっすぐ帰宅した。と言うより帰宅中だ。

今日はまだ新学期二日目なので授業というより午前中が全てHRで潰れて終わる。学生である僕としては嬉しい事この上ない。帰りに聞いた「明日から授業が始まる」という言葉は嘘だと信じたい。出来る事なら一生。

話が変わるが、寝坊が日課である僕は、朝ご飯というものを食して来てはいない。毎朝、完璧超人な妹さんが作ってくれているのだが、食べる時間もなく家を出て来てしまう。ここ数年間そんな生活を続けているのだけど、文句一つもなく朝食を作ってくれている妹はすごいと思う。

で、そんな状況なもんだから昼頃にはお腹がオーケストラ並みの音を奏でる。胃袋のパイプオルガンやあゝ。意味が分からない。

腹が減っては戦ができぬ、という言葉があるようにせっかく午前中に学校が終わってもお腹がすいては遊ぶ気がしない。まずは腹ごしらえだ、という事で教室でぼーっとしている姉さんを置いて一目散に教室から出てきた。

「っと、もう着いたのか」

さすがに志望理由に選んだだけあって、学校から我が家まで10分もかからずに着いた。

カバンの中から鍵を取り出し、鍵穴に入れたところでふと思う。

あれ？ 今日中学校って午前中で終わりだっけ？ もしそうで無いとすれば、今家の中に料理をできる人がいないことになる。そしたら昼食どうしよう。もちろん、妹に家事を任せっきりの僕も姉さんも家事スキルはゼロなので、自分で何か作るという案は即行で却下される。もしかしたら冷蔵庫の中に作り置き何かがあるのかもしれないが、ぼくも曲がりなりにも成長期真っ盛りな男の子な訳で、作り置きで食欲が十二分に満たされるとは考えにくい。そもそも作り置きしてないのかもしれない。外で何かを食べるという事

も出来ない事もないが、家の中に入りカバンをおいてくつろいだ瞬間に、入学直後の独特な緊張感と空腹によって肉体的にも精神的にもライフがゼロになった僕の体がそう簡単に言う事を聞くとは思えない。これは姉さんにも言える事だ。姉さんの場合はいつものことだけだ。

そうすると、妹が中学校から帰ってくるのを待つしか無い事になる。だがしかし、現時点でピークに達している僕の空腹度合いであと数時間我慢出来るだろうか？ いや、できまい。これは反語を使うほどまでに強調すべきことだ。もしかしたら姉さんがそのままで空腹ではなくて、頼んだらどこかで何かを買ってきてくれるかもしれない。しかし、その可能性は絶無だ。あの食べ物好きな姉が空腹ではない、なんてそんなことはあり得ない。今ここに矢が降ってくるくらいあり得ない。それに、あの姉を一人で買い物に行かせるなんて言語道断だ。半袖で冬の山に登るのと同義だ。だとすれば、この先に待ち受けているのは少なくとも良い事ではない。と言う事はあれか、姉弟揃って餓死か。新聞に載るかな？ それなら一面に大きく載せて欲しいな。

などと自分の行く末を考えつつ（その割には楽観的に）、鍵穴に刺したままの鍵を回す。もちろん、鍵は閉まっていた。ここで開いていたら泥棒さんが入っている事になる。それは勘弁して欲しい。ただでさえあんな姉を持って毎日が騒がしいのにこれ以上の面倒ごとなんてごめんだ。

僕がドアを開けて、玄関で靴を脱いでいると「お姉ちゃん、お兄ちゃん、おかえり〜」と声が聞こえた。よかった、帰ってた。これで餓死しなくても済む。新聞に載れないのは残念だけど。

と、戯言めいたことを心の中で吐きつつ、リビングのドアを開ける。そこでリビングと一体化しているキッチンで料理らしき事をしている妹に声をかける。

「ただいま、憂」

「おかえりお兄ちゃん。もう少しで出来るからちょっと待ってね」

そう笑顔で答えたのは、我が妹の憂。前にも説明したが、この家の家事を全て引き受けてくれている。もうすばらしすぎて涙が出そうだ。僕や姉さんとは大違いだ。ちなみに、こんな妹のおかげで正月などはこたつから出なくても済むという日本人にとっては最上の幸福と言っても過言ではない環境でいられるのだ。感謝感謝。

キッチンからは香ばしいソースの匂いと、じゅー、という焼けるような音がしてくる。うーん、察するに今日は焼きそばか。確か昨日はお好み焼きだった気がする。ソースの消費量多いな。

「あれ？ お兄ちゃん。お姉ちゃんは？」

憂が質問してきた。その時にちよつと首を傾げたのが実にかわいらしい。もー、食べちゃいたい！ 実際にやったら犯罪で捕まっちゃうからやらないけど。

つと、それより姉さんか。確か、僕はお腹が異様に空いていたので、いつもは一緒に帰っている姉さんを放って足早に教室を出たはずだ。教室を出る時に呼び止められた気がしなくても無いけど、空腹状態の僕に他人を気にするというスキルは付いていない。

もしかしたらあの姉の事だから、道に迷って家に辿り着けないかもしれない。いつも（と言っても二日間だけだが）登下校の時は僕にくっついて歩いている姉さんが道を覚えているはずがない。途中で道を覚える努力をしていれば良いのだが、僕が見ている限りそんな様子は微塵も感じられない。なんかいつも、ほけー、としている。そんなところがまたかわいい、とシスコンの僕は思う訳だ。「すぐに帰ってくるよ」

僕の思考を簡素に、そして簡潔にまとめて憂に伝えておいた。どこをどうしたらそうなるのか、些か僕自身も自分の脳の思考回路に疑問を持たざるをえないが、しかしここには『憂を悲しい目に会わせてはいけない』という僕の座右の銘とも言える信念が深く関係している。

もしここで本当の事を言ったら、憂は即座にパニックに陥るだろう。そりゃそうだよな。あの姉が何事も無く無事に帰ってくる

とは思えないもんな。下手したらここで泣き出してしまいかも  
もしれない。憂の泣き顔を見るのは嫌だから、本当の事は言わ  
ない。

なに？ 嘘はいけないって？ 嘘も方便って言うじゃないか。  
君。

「そつえば、この家に二人きりつて相当久しぶりだな」  
「えっ？」

僕は思つた事を口に出す。  
いつもこの家には姉さんがいたからなあ。憂と二人つきりつ  
て言うのは本当に久しぶりだ。

「……………」  
「……………」

なんだろう。憂が料理の手を止めてとつてもこつちを凝視し  
ている。睨んでるようにも見えなくもない。

あれ？ もしかして僕と二人きりが嫌だ、とか？ え？  
なにそれ。泣きそう。

確かに小さい頃はよく「お兄ちゃん」ってくつついてきてた  
のが、小学校高学年になつたらなくなつたけども。詳しく言うと、  
憂が小学六年生のときの、7月23日。ショックすぎて今でも覚え  
てる。

もしかして…嫌われてるの？ 僕。だとしたらすつこい泣  
きたい。今すぐ泣きたい。

「あのー、憂さん？」  
「ひゃうっ！」

ええー。なにこの反応。マジで嫌われてる感じじゃん。な  
んかもうショックすぎて声も出ないわ……………。

今日は学校が午前中で終わりつ。だから早く帰ってお兄ちゃ  
んとお姉ちゃんのお昼ご飯を作らなきゃ。

あ、紹介が遅れました。憂です。

家に帰ってご飯を作っていると、二人が帰ってきたみたい。もしかしたらどつちかだけっていう可能性もあるけど、お姉ちゃんはいつもぼわぼわしてるから、登下校のときも一緒のはず。中学校のときもそうだったし。

……と思ったら、リビングに入ってきたのはお兄ちゃんだけだった。

あれ？ お兄ちゃんだけ？ お姉ちゃんは？ お兄

ちゃんがないと登下校できないはずなのに……。……。でも、お姉ちゃんももう高校生だもんね。いつまでも二人で登校っていう訳にはいかないよね。

「ただいま、憂」

「おかえりお兄ちゃん。もう少しで出来るからちよつと待ってね」  
リビングに入ってきたお兄ちゃんにあいさつをします。

……やっぱりかつこいいなあ、お兄ちゃん。お姉ちゃんも暖かくてかわいいし。こんな家族に囲まれて私は幸せです！

……じゃなくて。お姉ちゃん、大丈夫かなあ？ 高校生になったって言ってもつい最近まで中学生だったわけだし、お姉ちゃん最後まで学校への道覚えてなかったしなあ。不安だなあ。

「あれ？ お兄ちゃん。お姉ちゃんは？」

一応、お兄ちゃんに質問してみる。

お姉ちゃんを信じてあげなきゃいけないとは思っけど、やっぱり心配だし。

「すぐに帰ってくるよ」

お兄ちゃんがそう答えた。

お兄ちゃんがそう言うなら大丈夫だね。うん、私もお姉ちゃんを信じてあげなきゃ。一瞬、間を置いたのが気になるけど。

「そういえば、この家に二人きりって相当久しぶりだな」  
「えっ？」

私がお姉ちゃんについて考えていると、お兄ちゃんがいきな



りそんな事を言った。

確かに、そうかもしれない。いつもこの家にはお姉ちゃんがいたし、この家はお姉ちゃんを中心にして回っているようなものだから、二人きりになる機会なんてそうそう無かった。

お兄ちゃんと二人きり。お兄ちゃんと、二人きり。

はわっ。はわわわわっ。

えっ！？ えっ！？

お兄ちゃんと二人きり！？

この家に！？ 私と！？

年頃の男女が一つ屋根の下にいると言うのは些か世間的にも倫理的にも問題があるんじゃないかと思ったりそもそも倫理ってなんだっけとか慣れない言葉を使った事に自分自身の中で自己嫌悪してみたりあでも二人きりと言っても兄妹だから別に意識しなければ良いんじゃないかとか思ってみたりでももう私の中では意識しないなんて無理だったり兄妹で意識し合うのはちよつとまずいんじゃないかとか思ったりでも意識してるのは私だけだったって勝手に納得してみたりそもそも私はなにが言いたかったんだっけと自分が言った事に整理がつかなくなったりああそれくらいパニックに陥ってるんだなあとかこんな状況の中でも自分の事を無駄に冷静に分析してみたりっ！

……はっ……お兄ちゃんと二人きり……。恥ずかしいよ  
う……。

「あの一、憂さん？」

「ひゃうっ！」

お兄ちゃんにいきなり話しかけられて思わず変な声を出して  
しまった。

い、いや、今のはお兄ちゃんが悪い。うん。いきなり話しか  
けるお兄ちゃんが悪い。うん。私は悪くない。

……で、でも今のでお兄ちゃんに変に思われたらどうしよう  
……。もしかしたら嫌われたかも……。お兄ちゃんに嫌われたら……

…うわーん。

……なんだろう、この気まずい空間は。

僕が憂に嫌われてるんじゃないかという疑問が、嫌われてるんだという確信変わって、約五分が経過した。

あの（僕が話しかけ、憂が奇声をあげた）後、憂はすぐに料理をするのを止めていてた手を再び動かし始めた。

「……………」

「……………」

その後もこんな感じで沈黙が続いている。僕からしたら気まずい事この上ない。なんかもうやだ。一刻も早くこの空気を打開せねばと先程から諸葛孔明並みに脳をフル回転させているのだが、しかしそんな簡単にこの状況を簡単に打破する策が思いついたら、高校受験のときに「……就職したら？」と担任教師から面談の際に言われる事は無かったのだと思う。それくらい僕の愚息ならぬ愚脳は世間一般からみると大きく道を踏み外しているのだ。もちろん、残念な方向に。

さて、僕の脳のスペックについて思考して現実逃避したところでこの状況はなんら変わる事はない。逆に悪化したと言っても過言ではない。タイムリミットは、憂が昼食になるであろう麺に具材を絡めソースで味付けをして焼いたものー焼きそばを作り終えるまで。それまでにこの状況をどうにかしなければこの家の中にしばらくの間気まずい空気が流れる事必至だ。それはどうしても避けなければならぬ。

理由としては姉さんのため……と言うよりは僕のためだ。あのいつもぼわぼわしててふわふわしてて地に足が付いていないような人が家の中の空気が少し変わったくらいで気付くはずがない。そりゃあもちろん、姉さんのいる前で僕と憂が大声をあげて喧嘩すれ

はいくら姉さんでも気付くだろつが、僕がーと言うより憂が精神年齢に大人なのでそんな事が起こるわけがない。これは暗に僕の精神年齢が低いという事を示しているが、実際そうなのだから仕方がない。

まあつまり何が言いたいかというと、あと数分の間に僕がどう動いてどういう結果を残すかによって今後一ヶ月弱、もしくはそれ以上の期間、僕の精神衛生上どういう影響が出るかを決まるのだ。なんと責任重大なことか。

と、唐突に僕の愚脳が妙案を思いついた。

そうだ、今はここから逃げれば良いんだ。勇気ある撤退、というやつだ。一旦退いて策を練り直そう。もともと思いついてないから練り直すも何も無いが。

そんなことをしてもどうにもならない。僕がこれからしようとしてることは敵前逃亡、それと同義だ。この場合は何が敵かは分からないが。

それは、分かつてる。

嫌というほどに。

そんな事をしたところで、事態は全くと言っていいほど動かない。

それは、あの時に嫌というほど、知った。

だけど、動かない代わりに、悪化もしない。

好転もしないし、悪化もしない。言うなればこれは現状維持だ。現状維持は僕の、いや僕の尊敬し敬愛する友人の得意技だ。今はそれを真似てみよう。

よし、思い立ったが吉日。即行動に移そう。

「…憂？　ちよつといい？」

「ひゃつ！　な、何！？」

……うわお。予想外の反応だ。なんというんだろつか、こう……拒絶反応みたいだ。そんなに僕と話すのが嫌なのだろうか。

「あの、さ。さっき姉さんがすぐに帰ってくるって言っただろ？」

「うん」

おお、話を聞いてくれている。話を聞いてくれない程までには嫌われて無いようだ。だが、油断は出来ない。

「そうは言っても心配だからさ、見てくるよ。家に辿り着けるか分からないし」

「う、うん……」

憂がなにか腑に落ちないような顔をしている。僕の作戦がバレたか？ いや、そんなはずが無い。いくら完璧超人の憂とはいえ、読心術は身につけていないはずだ、多分。そう言い切れないのが怖いんだけど。

「じ、じゃあ、行ってくるわ」

ばれてる可能性は無いとは思っけれども、万が一という事もある。ここは三十六計逃げるにしかずばりにここから早いこと退散させてもらおうしよう。

僕が腰を浮かせた時に、がちゃ、という音をたてて僕が十分程前に通って来たドアが開いた。

「ふいー、ただいまー。疲れたよー」

「……………」

僕の作戦が塵芥となって消え去った瞬間だった。

第2曲目 僕にその意味は到底理解しがたいものだったのだろう、と思う。

予想通りというか何と云うか部屋に入ってきたのは姉さんだった。この場合は帰ってきたと言う方が正しいのだろうが。この人はいつも僕の予想の斜め上をいく行動しかないな。その行動のせいで大概困らせられるんだけど。

さて。

姉さんが帰ってきたため、その後待ちに待った昼食という流れになったのだが、憂の機嫌がそう簡単になおるはずもなく、僕としては非常に気まずい空気の中での食事となった。

そんな中で食べているとせっかくのご飯もおいしくないんじゃないか、なんていう疑問を持った時もあったが、しかし空気の張りつめた感じだけで人間の三大欲求に数えられる食欲が衰える訳もないどこかで『空腹は料理にとって最大のスパイスである』なんていうのを聞いたことがあるような気がするのだが、今回のことでそれを実感した。つまりなにが言いたいかというと、どんな状況であろうとおいしいものは結局おいしい、ということだ。うん、食べ物最高。だがこの家の中の空気が変わる訳ではないので実にづらいことこの上ない。その中で平然としている姉さんには尊敬と皮肉を贈呈しようと思う。

という訳で（どんな訳だ）今は僕は今日の全てのイベントが終わった後の自室にいる。まあ、今日はもうあの気まずい空間に放り出されることはないという空間だ。ああ、平和万歳。

と、ふと自分のベッドに横たわりながら考える。

なぜ、いきなり憂の機嫌が悪くなった、嫌われはじめたのか。いや、そりゃあ嫌いになることに理由は要らない。人を好きになるのに理由がいらないのと同じで。でも、理由はなくてもきっかけはあるはずだ、と考える。

ふむ、ではそのきっかけはなんだろうか。

もちろん、憂の気分がそんな気分だったとでも言ってしまうばそれまでだし、これから使う脳の容量を削減できるのでできる限りそうしたいのだが、僕の性分としては謎のままで置いておくのは嫌なのだ。分からないことがあつたら分かるまでその謎をつきつめる、それが僕という人間なのさ！　嘘だけれども。事実無根だけれども。しかしまあそう嘘を交えての決意をしたところで簡単にそのきっかけが思いついたらこんなところで物を考えてない。以前にも言ったが、僕の愚脳は世間一般から残念な方向に大きく道を踏み外しているのだ。

……ああ、鬱だ。憂に嫌われるとか……。そんなことを言うとしスコンだとか言われるけど、別に今さらそんなこと良い。そんな周囲の身勝手な僕への評価よりも、憂の好感度の方が僕にとってはかなりの割合で重要だ。だって、シスコンですから、僕。

無駄な宣言をしたところで何もやることはないので、歯を磨くために体を起こす。憂のことは今のところは置いておこう。僕としてはかなり気が気じゃないけど、今日は現状維持と決めたのだからそのように行動しよう。僕の座右の銘は有言実行です。純度100%の嘘だけど。

実際はもう眠気が僕の体の中で飽和量を超えたからだ。どんな大きな悩み事を抱えてても眠気には勝てない。昼食の時も思ったけど、三大欲求には敵わないな。うん。

よっ、とベッドから降りて部屋のドアを空けに向かった時、こんこん、と部屋のドアが音を出した。僕の部屋のドアには勝手に音が出るような役に立つのか立たないのかよく分からない機能は搭載さ

れてないので、多分ノックされたのだろう。我ながら遠回りな物の考え方だな。

さて、ノックしたのは誰だろうか。と考えるまでもなく僕の中では答えは出ている。

今、この家には両親はいなくて、憂には絶賛嫌われ中なので、自分で言つて悲しくなるな、これ。まあ、そんな事情なのでこの部屋のドアをノックするのは姉さんだけのはずだ。

という結論をまとめてドアノブに手をかける。

「お兄ちゃん……起きてる……？」

うおい。まさかだな。

いきなりドアの向こうから声をかけられた。幽霊の声が聞こえるなんて能力は無いので、ついさっきこの部屋のドアをノックした人物なのだろう。で、その人物というのが……。

「う、憂……？」

「な、何……？」

憂だった。

何故？

という疑問が頭の中を駆け巡る。なに？　あまりに嫌いすぎて嫌がらせしないと済まないとか？　既にぼろぼろな僕の精神に、それを知っていながらとどめを刺しに来たとか？

うん、どれにしても覚悟した方がよさそうだ。

「お兄ちゃん、部屋の中……入ってもいい？」

「へ？　あ、ああ……」

僕は戸惑いながらも憂を部屋の中に招き入れる。

説明しておく、僕の部屋の中はベッドと机とその上にノートパソコンという実に質素なつくりだ。しかも、僕の家族の基本的な生活空間は揃って集まれるリビングなので、この部屋にいる割合は家にいる時間の3割程度だ。ベッドはその上で寝る、という本来の使い方に則した方法でしか使っていない。ここで一つ補足しておく、僕には睡眠をとる以外の意味の『寝る』という行為を共に行っていく

れる異性はいない。有り体にいえば、彼女いない歴〃年齢ということだ。それに机は専らパソコンを使うときにしか使っていない、と言ってもシスコンである僕からしたら一人で部屋にこもってパソコンを使っているよりは姉さんや憂と話している方が楽しいと考えている。よってその時間は極端に低くなる。ちなみに、机の本来の使い方である勉強については全くと言っていいほど、というか全くこの机では行っていない。僕ほどになると学校の授業だけで事足りるのさ。……………すいません、嘘つきました。僕はそれほど学校の成績が思わしくなく、はい。そんな僕がなんで家で勉強に励んでいないのかと言うと、家での僕は『我が辞書に勉強の文字は無い！』状態だからである。中学校の頃は、僕の幼馴染でとても成績優秀な女の子に定期テストの度に双子の姉弟共々お世話になっていたため、それほど困ることはなかった。その子とは高校も同じなのでまたそれでいいか、と考えている僕であった。

僕は誰に向かって説明しているのだろうか、なんてことを考えながら憂を僕のベッドに座らせる。僕は自分の机の椅子に。

僕が座ったところで訪れる、変に張り詰めた、少しでも動かしてしまえば今にでも音を立てて弾けてしまいそうな緊張感。これは今日一日家の中を満たしていたもの。僕の精神衛生上よろしくないとされるものだ。

もしかしたら憂の方から僕の部屋に来てくれるという行動で歩み寄って来てくれたからこの雰囲気をもうお世話にならなくてもいいかと思っていたのに、世界の法則からは逃げられなかったということだね。

要するに人生はそんなに甘くないんだ。なんて僕が言う資格は無いのかもしれないけど。

その時、急に、唐突に、表現の仕方はいろいろあるけど、とにかくいきなりこの部屋を満たしている僕の精神衛生上よろしくない緊張感を破ったのは憂の一言だった。

「お兄ちゃん……………怒ってる？」



はい？

これがたつた今僕のベッドに座ってる妹から発せられた言葉です。意味を理解すると、憂は僕が怒っているかどうか聞いてきた、と。僕が、怒ってる？

何故？

そりゃあ、この家の空気にあてられてただでさえ狂ってる僕の脳みそがちよっと、いやかなりの割合で壊れているけれども、しかし僕が認知するかぎりには僕は怒っていない、と思う。僕が多重人格だったら別だけれども。

僕が頭の中で疑問符を発している旨を憂に伝えてみると、

「だって、お昼の時間にお兄ちゃん、お姉ちゃんを探しに行く、とか言って家の中から出ていこうとしたでしょ？　それに、その後もずっと黙ってるし、もしかしたら、私の事、嫌いになって、怒ってるの、かなあ、って」

そう返してきた憂に憂の目には涙と思しきものが溜まっていた。今にも零れそうだ。

それにしても、昼のあれの目的がばれていたとは。そんなにいろいろ出来て、そのうえ人の心を読めるなんて君、警察になれるよ。もしくはなんでも屋。確か僕の知り合いにもなんでも屋っぽいのがいたけど、あの人自分の事なんて言ってたっけ。まあ、いいか。さりげなく自分の思考を脇道にそらせる僕。こんなことでもして自分のペースを取り戻していかないと、目の前で妹が泣きそうになっているなんてシチュエーションの中じゃパニックに陥るかもしれないからね。

……よし、落ち着いてきたところで現状確認といこう。

今は僕の部屋の中で、憂と僕の二人きり。うん、よし。ここまでは理解できる。

次に、憂は僕のベッド、僕は自分の机の椅子に座って向かい合っている。ここもおーけー。

問題が次。憂は僕が憂の事を嫌いになって、なおかつ怒っている

のではないかと言い、涙腺崩壊直前。ここがいまいち理解できない。だけど、僕の足りない頭をフル稼働させると、憂の言った言葉の意味はまるで、まるで僕が憂の事を嫌いになったって

「心配、なのか？」

「……………うん」

憂は少し間を置いて頷いた。その瞳からはすでに涙が零れている。僕が憂の事を嫌いになる。

そんなことを気にするということは、一般的に考えて嫌われたくないということだろう。憂が世間から掛け離れた存在なら、これは当て嵌まらないのだろうけど、憂はこの家一番の常識人だからね。この考えで合っているのだろう。そうすると、僕は嫌われてはない、ということになる。

そう考えると、今日の事は僕のはやとちりだったのか。まずは一安心。

僕は軽い笑みを浮かべ立ち上がる。

「……………お兄ちゃん……？」

困惑している憂の横、つまり自分のベッドに座り、そして憂の頭を撫でる。

「大丈夫。僕が憂のことを嫌いになることは無いから」

「……………本当？」

「もちろん。どこの世界に妹のことを嫌いになる兄がいる？いや、もしかしたら世界中探したらいるのかもしれないけれども、少なくともこの僕は違うよ」

僕の口から出たとは思えないような言葉の数々。多分、後で自己嫌悪することだろう。うわっ、恥ずかしいな、僕。

「……………本当に？」

「本当だつて。それより僕の方も勘違いしてたみたいなんだ。僕が憂に嫌われてしまったんじゃないかってね」

「そんなこと……………！」

「うん、わかってるよ。だから言っただろ？勘違いだつて……………」

「ごめんね、心配させて」

「……………お兄、ちゃん……………」

憂はいきなり僕に寄りかかり、そして僕の胸で泣いた。

僕は、そうしていいのかは分からなかったけど、今にも壊れそうだったたたひとりの少女を、僕の力で壊さないように、でもしっかりと、抱きしめてあげた。

涙の勢いが増した、気がした。

その涙が悲しさからの涙だったのか、嬉しさからの涙だったのか、はたまた違う意味の涙だったのかは、本人にしか分からないし、本人にも分からないだろう。

でも、少なくとも、僕にその意味は到底理解しがたいものだったのだろう、と思う。

まだ涙を流し続ける憂をその腕に収めながら、僕はついさっき僕が言った言葉のことを考えていた。

“僕が憂のことを嫌いになることは無い”

自分で言ってて実に安っぽい言葉だなと思う。

人が生きてく上で感情が動くことなんていくらでもある。それが好きになるという正の方向でも、嫌いになるという負の方向でも。もちろん、どんなに愛しい人でもどんなに大切な人でも負の方向に動くこともある。それが一生ものか、その時の一時的な物かは別にして。

故に、“嫌いにならない”なんてことは無い。そんなことありえないんだから。

「いや、僕はそれ以前の問題か……………」

僕は一人呟く。

好きになる、ということに理由やそれ以前の感情は絶対じゃない、とは言えないが少なくともあってもなくても同じことだろう。一目

ばれ、なんて言葉もあるんだから。

だが、嫌いになる、ということに関してはそうなる以前に何かしらがあつたと考えるべきだろう。一目ぼれはあつても、一目見た瞬間に嫌いになることは稀だろう。嫌いになる過程に何かしらの感情が働いているはずだ、と思う。それが好きなのか別のものなのかは知らないけど。

自分から相手に歩み寄ろうともしないのに、嫌いになるもないいや、嫌いになれない。嫌いになるなんて身勝手なことをしてはいけない。それ以前になんの感情も持っていないから。

「本当、いやになるなあ」

自分で自分に吐き気がする。

そんな資格もないことは分かつてる。

自分で勝手に物を考えて、勝手に自己嫌悪する。このことがどんなに身勝手なことか。僕は体をもつて知っている。まさに、文字通り。

確か幼稚園に通っていたところに、『やられて嫌なことは、人にははいけません』なんてことを先生から聞いた記憶がある。たしか年中だったと思う。今思えば僕が素直に教育というものを受けたのはここまでだったのかもしれない。当然、その当時幼稚園児だった僕はこの言葉の意味を理解していなかった。というよりこの言葉を幼稚園児で理解できる人間は少ないだろう。もしかしたらいないかもしれない。

まあ、そんなことは置いといて。

僕がこの言葉の意味を本当に理解するのはそれから二年後。

きっかけは僕が壊したこと。

その時のあの人の顔は今でも忘れない。

その時の気持ちも今でも鮮明に覚えている。

初めて、壊した。

理由は、よく覚えてないけど、その事実だけが僕の頭の中に残ってる。

僕がこんなことを考えるのは筋違いかもしれないけど、あの人は今、笑っているだろうか。いや、そりゃあ初恋の人にはいつまでも笑っていてほしいと思うでしょ？　ね？

いや、でもそんなことをこの僕が考えるのは、こんな僕が考えるのは、尊敬し敬愛する友人の言葉を借りるのなら、

「戯言、なのかな」

……………ああ、駄目だ。眠い。今憂いるけどいいや。もう寝ちゃおう。って、あれ？　さっきから憂の声が聞こえないな。

そう思っ僕はふと腕の中の憂を見る。そこにいるのは幸せそうな顔で寝息をたてている憂だった。……………寝ちゃったのか。

今は……………1時か。寝坊が日課の僕はそれと同じように夜更かしもしてる訳で、いつもはこんな時間に寝ることは無いんだけど、普段と違う頭の使い方したからかどうかは分からないけどめっちゃくちや眠い。

うん。意識が朦朧としてきた。いいや、このまま寝よ。おやすみ、僕。

いやいやいやいやいや。これは無いって。どれくらい無いかと言うと、フル馬拉ソンした後にもう一回フル馬拉ソンするくらい無い。

なんて言う風に現実逃避したくなる今の時刻は午前6時34分。朝だ。早朝だ。いや、誤解しないでほしいが、毎朝この時間が現実逃避したくなるのではなくて、今僕が現実逃避したくなるのがこの時間だったと言うだけだ。

さてさてそんな状況がどんな状況かと言うと、

「……………ううん……………」

ちなみにこの声は僕ではない。

今、僕の目の前にはとある人物がいる。

息がかかりそうな、というより実際に息がかかってる顔と顔の距離。

何故か抱きかかえるようにその人物の腰にまわされた僕の腕。かなり密着している二人の体。

そして、感じられるのは女の子独特の柔らかさ。

この状況が自他ともに認める紳士である僕でなければ襲われても仕方が無いんじゃないかなあ、とか心配してみたり。現にこの子はとっても美少女な訳で、紳士である僕でさえも精神ががりがり削られているのが分かる。

それに、たった今この子と密着している場所がよろしくない。

その場所とは　　ずばり、ベッドの中。

少しでも知識のある人なら、「え？　何かあったの？　　というかあったんでしょ」とでも誤解されそうな、誤解してくれとでも言っているようなシチュエーションだ。

ここで僕に毎朝起こしてくれる幼馴染の女の子がいたのならこの光景を見た瞬間、「ば、バカあああ！！」とでも言っつて僕を殴りこの部屋から飛び出していくことだろう。僕にそんな子いないけど。全部妄想だけ。

でもまあこの僕が、周囲の認識で実に怠け者であるという僕が一人で起きられるはずもなく、誰かに起こしてもらっているという点では僕の妄想も事実を告げている。

紳士で怠け者な僕。うん、いいんじゃないかな。とは言ってもここで否定すると僕の存在自体を否定するという非常に鬱屈した人間になってしまうのでそんなことしないけど。

さて、話を戻そう。

起こしてもらっているということは、つまり起こしてくれる人がいるという訳で、その人物がいなければ、じゃあお前は何だかわからない存在に起こしてもらっているのかなんていうことになってしまう。

もしかしたらそのなんだかわからない存在が実は宇宙人で、僕を

アブダクションする機会を伺っているなんてこともある。だけど僕が起こしてもらっている人物はちゃんとした人間なので、その点では安心だ。なんの安心だい。

やばいな。心の中で一人ツツコミするほど焦ってる。結構重症だ。  
……………ん？

ふと考えたんだけど、例えばいつも自分の事を起こしてくれる人よりも早く起きてしまった場合はどうすればいいのだろうか。日頃の感謝を込めて起こしてあげればいいのだろうか。だけど、この問いに答えられる人は少ないのだと思う。なぜなら、起こしてくれる人は起こさなければならぬ人よりも早く起きるから、その人の本意にしろ不本意にしろ起こす、という役を受けているのだから。

今、僕がこんな問い掛けをしたのにはもちろん立派な理由がある。まさに今、僕がそんな状況なのだ。詳しく言うところ起こされる側の僕が起きていて、起こしてくれる人が寝ている状況。しかも僕の間近で。まじか、とても言いたい気分だ。……面白くないな。

では、さんざん先延ばしにしていた僕を起こしてくれる人とは誰だろうか。今現在、この家には三人しかいない。僕と憂と姉さんだ。そしてその中で物理的に考えて僕を起こすことが出来るのは二人。まあ、つまり憂と姉さんだ。そりゃあ、僕が僕自身を起こすなんていう人類の英知を遥かに超え、常識を覆すような事が出来るのなら別だけれども、僕は至って普通のどこにでもいるような紳士だ。そんなことはできない。

そして、その二人の中で常識的に考えて僕を起こすことが出来るのは憂だけだ。姉さんに人を起こすという事が、それ以前に人よりも早く起きるなんていうことが出来るはずが無い。そんなの、天地がひっくり返っても無理だ。僕もだけど。

そんな訳で、普段は憂が起こしに来てくれるはずなんだけど。

「いやいやいやいや、これは無いって」

僕は情報整理と脳内の情報の検索を同時に行いながら溜め息混じりに呟く。とは言っても僕の脳がそんな並行した作業に耐えられる

はずがないからどっちかに偏っちゃうんだけど。

なに？ やっっちゃったの？ やっちまったのか？ 昨日の僕。いくら健全な年頃の高校生でその辺の欲求があるとは言つても、そして目の前の子がいくら美少女だと言つても、妹に手をだすとは！ 見損なつたぞ僕！

……はあ。この後の人生が容易に想像できる。このまま憂に告発されて、裁判では情状酌量の余地なく問答無用で有罪。その後刑務所行き、か。これはもう終わったかな。僕にしては華々し過ぎる最期かもね。

……いや、ちょっと待てよ。憂もここで寝ているということは同意の上、か？ いや、それはもつとまずいだろう。なにそれ。どこのエロゲー？ やばくない？ 世間の目とか倫理的な意味で、さてもう僕がこんなに焦っている意味がお分かりだと思うが、僕の目の前で幸せそうに寝ているのは我が妹、憂である。

$$\vdots$$

…… ああ、かわいいなあ。もういつそのことこのままぎゅってしたいなあ。…じゃなくて。僕は思考を現実に取り戻す。

うーん。この後どうしたもののか。憂を起こす？ いや、やめておこう。なんか危険な気がする。えーつと後は……。……

……もういいや。二度寝しよう。

こうして社会不適合者が生まれていくのか。なんてことを自分のことながら他人事のように考えている僕だった。

「お前さ、部活に入んの？」

「いや、まだ考えて無い」

時は飛んで今は学校の昼休み。友人と楽しい昼食タイムである。ちなみに今日の朝はといえば特に何もなかった。憂となんやかんやあったんじゃないかという僕の推理は、「お兄ちゃん、ごめんね



……昨日急に寝ちゃって……」という憂の言葉によって崩された。ほっとしたような残念なような。憂との関係も無事修復できた。僕としてはもつと長期戦になると思っていたので、万々歳だ。

まあまあそんな訳でそのことについて友人と談話中なのである。

「まあ、お前と憂ちゃんだったらありえるかもな」

「何を失礼なことを。僕は自他共に認める紳士だというのに」

『僕Ⅱ紳士』という構図に待ったをかけたのは、中学からの友人の佐竹春樹さたけはるき。何を隠そうこの春樹こそが『ハーレム作れるぜひゃっほー！』な、浅はかでアホで嘆かわしいやつ』である。とはいってもいつもそんなオーラが体中から溢れ出ている訳ではない。実はこの友人、スポーツは出来るわ勉強はできるわそれに顔もいいわで、周りから見ればほぼ欠点が無いような人間なのだ。ぶっちゃけてしまえば猫を被っているのだ、この男は。恨めしいことこの上ない。憂といい春樹といいどうしてこうもぼくの周囲には完璧超人が集まるのだろうか。誰かの陰謀を感じずにはいられない。

ああ、それにしても春眠暁を覚えずとはよく言うけれども、なんだって春はこんなにも眠いのだろうか。うーん、このまま寝れそうだな。僕はつくえに突っ伏す。

「僕もうだめだよ、パトラッシュ……」

「誰がパトラッシュだ。全く、お前はいつも寝てばっかだな」

「睡眠欲っていうのは人間の三大欲求の一つだからね。何を差し置いてもその欲を満たそうとするのは本来人間にあるべき姿なのさ」

「はいはい、お前の持論は分かったから。で、次音楽だぞ」

「分かってるよ……………おやすみ」

「わかって無いじゃん。先生に怒られても知らんぞ」

最後の方春樹がなにを言ってたのかあまりよく聞き取れなかった。音楽ってどこでやるんだっけ。などと考えながら僕は今日の昼寝タイムへと突入していった。

その後、音楽の山中さわ子先生に怒られたのは余談である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8375s/>

---

けいおん！ ～マネージャー物語～

2011年10月7日22時22分発行